

## 親への愛着による親子のストレス場面に対する評価の差異

——図版に対する反応からの検討——

丹羽智美

本研究の目的は、親子のストレス場面での子どもの原因帰属、対処行動、対処行動によるその後の変化について、親への愛着によってどのように異なるのかを、心理的負荷の異なるストレス場面で比較することであった。その結果、脅威高場面において愛着回避の効果が見られた。愛着回避高群は愛着回避低群よりも、ストレス場面は親のせいでは起こったと原因帰属し、それに対して攻撃性の高い行動をとる人が多かった。愛着回避の高い人は心理的負荷の高い場面において愛着システムが活性化するため、脅威高場面でその特徴が明確に出たと考えられた。愛着不安は脅威低場面の対処行動後の変化に対してのみ効果がみられた。愛着不安の高い人はストレス場面が改善されると予測できないことに対して、自分に対する自信の低さがそこに示されたと考えられた。以上より、愛着回避は他者に対する評価の低さへ、愛着不安は自分に対する評価の低さへの影響が示された。

キーワード：親への愛着・ストレス場面・原因帰属・対処行動・対処行動後の変化

### 問題と目的

友達とのいさかいや授業や勉強に関する悩みなど日常的におこる出来事から、親の離婚や親しい人の死などといった心理的衝撃が大きな出来事まで、青年期には様々なストレス場面が存在する。そのストレス場面に対してどのように対処し、解決できるかが、青年の精神的健康に大きく影響することが指摘されている (e.g. Seiffge-Krenke, 2006)。個人が生じたストレス場면을どのようにとらえ、対処するかに対して一定の規則性が存在しており、個人差が生じるメカニズムについて説明しているものの1つに愛着理論がある。

愛着とは、養育者との間に形成される情緒的な絆である。養育者は概ね親となることが多い。そして、愛着は生まれたときからの親子の相互作用の積み重ねにより形成される。子どもが保護や支援を求めたときに、親が敏感に情緒的に応答することで、子どもは親の反応に対する信頼感を形成していく。それと同時に、親に保護され、支援される自分に対して価値のある存在であるという確信も形成する。これらを内的作業モデル (Internal Working Model) といい、親子間で起こる種々の出来事を知覚し、心的にシミュレートすることで未来を予測し、自らの行動を決定していく機能をもっている (Bowlby, 1973)。

愛着は親子の相互作用から形成されるため、相互作用の内容によって愛着に個人差が生じる。

それを明らかにしたのが、Ainsworth, Blehar, Waters & Wall (1978) である。Ainsworthらはストレンジ・シチュエーション法を用いて、安定型 (secure)、回避型 (avoidant)、抵抗/アンビバレント型 (resistant/ambivalent) という3つの愛着スタイルを見出した。そして、各愛着スタイルの内的作業モデルは以下のように特徴づけられることが分かっている。

安定型の人は、親に支援を求めたときに敏感に情緒的に応答されてきた経験から、親は自分を受容し、支援してくれる存在であるという信念を持っている。そのとき同時に、自分は親から受容され、支援される価値のある存在であるという確信も持っている。一方回避型の人は、親に支援を求めたときに親から拒否されたなど、望む対応をしてもらえないことが多かった経験から、親は頼りにできない存在であるという確信を持っている。すると、親を頼ることから回避し、結果的に自分は親を頼らずにやっていける存在であるという確信を持つようになる。そして抵抗/アンビバレント型の人は、親の感性の欠如から、親に支援を求めても一貫した対応を受けられなかった経験により、親はどう反応するか予測できない存在であるという確信を持っている。そして、必要な時に支援してもらえない自分自身に対して低い価値意識を持つようになる。

このように内的作業モデルに差があると、直面した出来事の知覚や、自他の行動のシミュレーション、自らの行動の決定のしかたに差異が出てくると考えられている。そのような内的作業モデルの差異による機能のしかたの違いを明確にみられる状況がストレス場面である。なぜなら、愛着の機能の1つに安全で安心した状態を常に保つよう制御することがある。ストレス場面によって安全で安心した状態が脅かされ、愛着システムが活性化すると、人は安心感の回復を目指す。その方法に各愛着スタイルの特徴がよく示されるためである。

では、ストレス場面での反応は愛着によってどのように異なるのだろうか。ストレス場面で注目されるのが対処行動である。ストレス場面に対する対処行動の選択について、一般的な他者に対する愛着スタイル<sup>1</sup>によって差異がみられると指摘されている。Shaver & Mikulincer (2007) は先行研究から、各愛着スタイルによる対処行動の特徴について以下のように述べている。安定型は近接可能性や情緒的応答性を備えた愛着対象がいたため、他者からのサポートを受けられるという信念が比較的強く、ストレス時においても対処できる自信がある。すると、問題焦点的、サポート希求的対処行動をしやすい傾向がみられる。一方、アンビバレント型は脅威への評価が高く、対処の資源への評価は低い。また、自分では対処できる自信は低いため、受身的・静観的・情動焦点的対処行動をしやすいという傾向がみられる。そして回避型は、他者から

1 青年、成人の愛着をとらえる場合、2つの方法が代表的である。1つは成人愛着面接による方法である。これは養育者との愛着関係に関する語りの構造や語り方に注目しており、これによって、安定自律型 (secure/autonomous)、アタッチメント軽視型 (dismissing)、とらわれ型 (preoccupied)、未解決型 (unsolved) に類別される。ストレンジ・シチュエーション法によって判断される乳幼児期の安定型、回避型、抵抗/アンビバレント型に対応する。2つ目は、一般的な対人態度から愛着のタイプを測定する方法である。Hazan&Shaver (1987) による方法と、Bartholomew&Horowitz (1991) による方法がある。乳幼児期の愛着スタイルに対応して、Hazan&Shaver の場合は安定型 (secure)、回避型 (avoidant)、アンビバレント型 (ambivalent) と類別される。Bartholomew&Horowitz の場合は回避型が2つに分かれており、安定型 (secure)、拒絶・回避型 (dismissing-avoidant)、怖れ・回避型 (fearful-avoidant)、とらわれ型 (preoccupied) となる。

の助力を必要とするような状況避けるため、不快な感情や思考にアクセスするのを制限するストレス回避的対処行動をしやすい。しかし、ストレスの程度が強く、長期化するような場合、情動焦点的対処行動をする傾向がみられる。

親への愛着によっても対処行動が異なることが明らかとなっている。Zimmermann, Maier, Winter & Grossmann (2001) は、課題解決場面で負の感情が知覚された時、愛着が不安定な人は共同解決者と協調した対処をせず、混乱した対処行動をとることを示している。また、Seiffge-Krenke (2006) では、安定型は対人ストレスに対して問題解決のために行動し、解決方法などを探る行動をしていた。反対に、問題から回避するような行動は少なかった。一方アタッチメント軽視型は問題解決のための行動をしないこと、そしてとらわれ型は、解決方法などを探さず、問題から回避するような行動をすることがわかった。これらの結果は、Shaver & Mikulincer (2007) の結果と類似しており、親への愛着によっても対処行動に同様の傾向を示すことがわかる。

次に、愛着によるストレス場面での原因帰属の違いに注目する。なぜなら、状況の認知によって選択する対処行動に違いがみられる(島津, 2003)ことから、愛着による原因帰属のしかたにも一貫性がある可能性が高いと考えられるからである。Pereg & Mikulincer (2004) は、一般的な他者に対する愛着スタイルによって一定の原因帰属スタイルがあることを指摘している。アンビバレント型の人は状況を過度に悲観的に評価するため、そのような状況が起こったのは自分の内的特性のせいであり、それはこの状況だけでなく他の状況でもそうなるだろうと帰属する傾向である、内的、安定的、全体的帰属をする傾向が高かった。一方楽観的に状況をとらえられる安定型や、他者の有効性を低く評価している回避型は、状況について内的、安定的、全体的に帰属しにくかった。

親への愛着によっても原因帰属先が異なることが示されている。丹羽・高木(2006)は対人葛藤場面における原因帰属について、親への愛着による差異を検討したところ、愛着不安の高い人は性格など、自己の安定した特性に帰属することが示された。愛着不安とは、愛着対象からの受容や支援を期待できるか不安を持っていることである。これはアンビバレント型の主特徴である(Brennan, Clark & Shaver, 1998)ことから、Pereg & Mikulincer 同様にアンビバレント型の人は自分自身の特性にストレス場面の原因があると考え傾向が強いことがわかる。

最後に、心的シミュレーションによる対処行動後の変化予測のしかたについて、愛着の違いによる差異に注目する。対処行動をすることでどう場面が変化するか予測は、対処行動に対する動機づけにつながってくると考えられる。愛着類型の中でも特にアンビバレント型の人は、日常の中で生じることについて統制することができないと考えていることが示されている(Collins & Read, 1990)。アンビバレント型の人は一貫性の低い親の養育を受けてきており、また、自分がストレス状況に対処できるというような自信も低い。そのため、ストレス状況を改善することは難しいだろうと否定的に予測する傾向が強いと考えられる。

このように、ストレス状況において原因帰属、対処行動、対処行動によるその後の変化については、愛着によって様相が異なることが考えられている。しかし、ストレス場面によって心理的

負荷に程度の差があり、それに伴って反応に差がある可能性がある。例えば Simpson, Rholes & Nelligan (1992) は、回避型の人には心理的負荷の低い状況では他者に対してケアを要求できるが、心理的負荷が高くなるとそれができなくなることを示している。このことから本研究では、ストレス場面での心理的負荷の程度による原因帰属、対処行動、対処行動によるその後の変化の差異を愛着から検討することを目的とする。

その際、実際の場面での反応ではなく、図版に対する反応から検討する。必ずしも自身の体験を問わなくても、愛着にかかわる情動を喚起するような間接的な素材への反応には、内在化された個人的な愛着体験が投影されると考えられている(久保, 2000)。また、図版を使うことによって、同じ場面への反応を比較できるという点でも有益であると思われる。

使用する図版は、青年期中期と後期に適用されている Resnick (1989) の6図版から、心理的負荷を生じさせる脅威の程度によって高低各1場面を選択し、使用する。中尾・加藤(2005)では、愛着システムを喚起する場面として親しい人との関係へのダメージが最も多くあげられており、他の場面よりも負の感情が高いことが示されている。それは Ainsworth のストレンジ・シチュエーション法における分離再会場面と類似すると考えられる。そのため、愛着による違いをみるには適切な場面であると思われる。

そして本研究では、親への愛着を愛着スタイルではなく、愛着不安と愛着回避からとらえることにする。最近では愛着を、愛着対象に対する不安(anxiety)と愛着対象からの回避(avoidance)で理解することが増えている。それらは愛着スタイルを構成する2要因であることがわかっている(Brennan et al, 1998)。愛着スタイルを特徴づける2要因がどのような部分に影響を及ぼしているのかを明確にできることで、愛着スタイルの示す行動や認知の特徴がどのような要因によって影響を受けているのかを示すことができると思われる。

## 方 法

調査時期;2005年4月上旬と9月下旬

調査協力者;350名(男性135名,女性214名,不明1名)

調査内容;以下の内容に回答を求めた。図版の場面に対して忌避感をもった場合、無理せず回答を回避するよう教示した。また、回答し終わってから辛さを感じた場合は申し出るよう促した。

(1) 親への愛着尺度:丹羽(2005)より、愛着回避9項目、愛着不安8項目からなる計17項目に対して5段階評定で回答を求めた。

(2) Resnick (1989) による図版<sup>2</sup> から脅威の程度の異なる2場面を選択し、使用した。青年期後期の青年にとっての脅威の程度を考慮し、脅威度の低い場面(脅威低場面)を「新たな地に家族で引越しをすところ」、脅威度の高い場面(脅威高場面)を「親が救急車で病院に運ばれようとしているところ」とした。そして、各場面について以下に関する回答を自由記述で求め

2 図版は Freeman & Brown (2001) を参照のこと。

た。

- 1) 図版の場面が起こった原因
- 2) この場面に対する対処行動
- 3) 対処行動によるその後の変化

## 結 果

### 親への愛着尺度の信頼性

親への愛着尺度の各下位尺度の内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出した。その結果、愛着回避は $\alpha = .82$ 、愛着不安は $\alpha = .90$ であり、十分な内的整合性があることが確認された。

### 図版に対する反応の分類基準

図版の場面に対する原因帰属について、「親のやむをえない事情で起こった（以下、親のやむをえない事情と記す）」、「親が希望し、選択した行動が引き起こした（以下、親の希望した行動と記す）」、「子どものやむをえない事情で起こった（以下、子のやむをえない事情と記す）」、「子どもが希望し、選択した行動が引き起こした（以下、子の希望した行動と記す）」、「その他」に分類した。

Table1 対処行動の分類基準

大カテゴリー名	小カテゴリー名	説 明
問題解決	計画	状況改善のため、今できる最善のことを考える。
	計画実行	上記で考えたことを実行する。努力する。
	情報収集	状況改善のための情報を集める。
	再検討	今まで持っていた自分の意見を再検討する。
	反省	謝る。自分の悪かったところを認め、改善する。
	被協力・被援助	他者から協力や援助をしてもらう。
	自己主張	自分の意見や気持ちを主張する。相手に改善を求める。
	被支持	自分の考えを誰かに分かってもらう。
気分の操作	問題の価値の切り上げ	自分を見直したり、成長するいい機会だと思う。
	問題の価値の切り下げ	大したことではないと考える。
	気晴らし	遊びに行くなどして、気分を向上させる。
	自己制御	自分で自分を励ます。
	正当化	自分は間違っていないと思う。
	楽観	なんとかなると思う。
何もしない	思考回避	あまり考えないようにする。
	諦め	理解してもらえない、説得しても無駄だとあきらめる。
	静観	なりゆきにまかせる。
	逃避	解決する努力を避ける。
攻 撃	攻撃	責める。あてつける行動をとる。
そ の 他	その他の対処行動	上記以外の対処行動。
対処行動なし	対処行動なし	ストレスを感じていないので、対処が必要ない。
記述なし	対処行動の記述がない	ストレスは感じていて、対処が必要だが、どう対処行動をとったのかの記述がない。

場面への対処行動については、坂田（1988）の下位尺度に反省と自己主張を分類基準に加えて設定した。それらに対し、神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野（1995）の2次因子分析の結果を参考に大分類にまとめた（Table 1）。

対処行動によるその後の変化については、「改善」、「悪化」、「変化なし」、「その他」、「記述なし」に分類した。

筆者と心理学を専攻する大学院生1名とで独立して評定を行い、一致率を求めたところ、図版の場面に対する原因帰属については97.13%（脅威高）、96.54%（脅威低）、場面への対処行動については79.83%（脅威高）、84.20%（脅威低）、対処行動によるその後の変化については92.20%

Table2-1 愛着回避による原因帰属のクロス集計表(脅威低)

	親		子ども		その他	1と3	1と4	2と3	2と4	計
	1.やむをえな い事情	2.希望した 行動	3.やむをえな い事情	4.希望した 行動						
愛着回避低群	80(44.2)	65(35.9)	7(3.9)	0(0.0)	29(16.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	181
愛着回避高群	68(41.2)	62(37.6)	12(7.2)	0(0.0)	22(13.3)	1(0.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	165
計	148	127	19	0	51	1	0	0	0	346

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

Table2-2 愛着不安による原因帰属のクロス集計表(脅威低)

	親		子ども		その他	1と3	1と4	2と3	2と4	計
	1.やむをえな い事情	2.希望した 行動	3.やむをえな い事情	4.希望した 行動						
愛着不安低群	76(42.5)	70(39.1)	7(3.9)	0(0.0)	25(14.0)	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	179
愛着不安高群	72(43.1)	57(34.1)	12(7.2)	0(0.0)	26(15.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	167
計	148	127	19	0	51	1	0	0	0	346

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

Table3-1 愛着回避による原因帰属のクロス集計表(脅威高)

	親		子ども		その他	1と3	1と4	2と3	2と4	計
	1.やむをえな い事情	2.希望した 行動	3.やむをえな い事情	4.希望した 行動						
愛着回避低群	169(93.4)	0(0.0)	3(1.7)	6(3.3)	3(1.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	181
愛着回避高群	135(80.4)	7(4.2)	1(0.6)	11(6.5)	14(8.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	168
計	304	7	4	17	17	0	0	0	0	349

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

Table3-2 愛着不安による原因帰属のクロス集計表(脅威高)

	親		子ども		その他	1と3	1と4	2と3	2と4	計
	1.やむをえな い事情	2.希望した 行動	3.やむをえな い事情	4.希望した 行動						
愛着不安低群	164(90.6)	2(1.1)	2(1.1)	9(5.0)	4(2.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	181
愛着不安高群	140(83.3)	5(3.0)	2(1.2)	8(4.8)	13(7.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	168
計	304	7	4	17	17	0	0	0	0	349

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

(脅威高), 97.08% (脅威低) であった。不一致であったところについては, 合議に基づく再評価を行った。

### 場面に対する原因帰属

図版の場面に対する原因帰属の記述の分類に対し, 愛着回避高群低群間, 愛着不安高群低群間でその人数の比較を行った (Table2-1,2-2,3-1,3-2)。なお, 愛着回避と愛着不安については平均値以上を高群, 平均値未満を低群とした。直接確率を求めたところ, 脅威高場面において愛着回避高群低群間の人数に有意差がみられた ( $p<.001$ )。愛着回避高群は愛着回避低群よりも, 親のやむをえない事情を記述した人が少なく ( $p<.01$ ), 親の希望した行動を記述した人が多かった ( $p<.01$ )。脅威低場面においては愛着回避高群低群間, 愛着不安高群低群間に人数の有意差はみられなかった。

Table4-1 愛着回避による対処行動のクロス集計表(脅威低)

	問題解決	気分の操作	何もしない	攻撃	その他	対処行動なし	記述なし	計
愛着回避低群	37(20.4)	3(1.7)	7(3.9)	5(2.8)	5(2.8)	43(23.8)	81(44.8)	181
愛着回避高群	40(24.8)	6(3.7)	14(8.7)	1(0.6)	6(3.7)	34(21.1)	60(37.3)	161
計	77	9	21	6	11	77	141	342

注：数値は人数, 括弧内は割合を示す。

Table4-2 愛着不安による対処行動のクロス集計表(脅威低)

	問題解決	気分の操作	何もしない	攻撃	その他	対処行動なし	記述なし	計
愛着不安低群	38(21.2)	8(4.5)	9(5.0)	4(2.2)	7(3.9)	39(21.8)	74(41.3)	179
愛着不安高群	39(23.9)	1(0.6)	12(7.4)	2(1.2)	4(2.5)	38(23.3)	67(41.1)	163
計	77	9	21	6	11	77	141	342

注：数値は人数, 括弧内は割合を示す。

Table5-1 愛着回避による対処行動のクロス集計表(脅威高)

	問題解決	気分の操作	何もしない	攻撃	その他	対処行動なし	記述なし	計
愛着回避低群	84(46.7)	1(0.6)	13(7.2)	0(0.0)	44(24.4)	0(0.0)	38(21.1)	180
愛着回避高群	64(38.6)	0(0.0)	10(6.0)	4(2.4)	43(25.9)	5(3.0)	40(24.1)	166
計	148	1	23	4	87	5	78	346

注：数値は人数, 括弧内は割合を示す。

Table5-2 愛着不安による対処行動のクロス集計表(脅威高)

	問題解決	気分の操作	何もしない	攻撃	その他	対処行動なし	記述なし	計
愛着不安低群	77(42.8)	0(0.0)	13(7.2)	0(0.0)	46(25.6)	1(0.6)	43(23.9)	180
愛着不安高群	71(42.8)	1(0.6)	10(6.0)	4(2.4)	41(24.7)	4(2.4)	35(21.1)	166
計	148	1	23	4	87	5	78	346

注：数値は人数, 括弧内は割合を示す。

場面への対処行動

大分類に対し、愛着回避高群低群間、愛着不安高群低群間でその人数の比較を行った (Table 4-1,4-2,5-1,5-2)。直接確率を求めたところ、脅威高場面において愛着回避高群低群間での人数差は有意であった ( $p<.05$ )。愛着回避高群は愛着回避低群よりも攻撃的対処をしている人数が多かった ( $p<.05$ )。脅威低場面においては愛着回避高群低群間、愛着不安高群低群間での人数差は有意でなかった。

対処行動によるその後の変化

図版の場面に対する対処行動の結果、どのようにその場面は変化したのかの記述の分類に対し、愛着回避高群低群間、愛着不安高群低群間でその人数の比較を行った (Table6-1,6-2,7-1,7-2)。直接確率を求めたところ、脅威高場面では愛着不安高群低群間での人数差が有意であった ( $p<.05$ )。愛着不安高群は愛着不安低群よりも悪化に関する記述が多かった ( $p<.05$ )。脅威低場面でも、愛着回避高群低群間での人数差が有意であった ( $p<.05$ )。愛着回避高群の方が愛着回避低群

Table6-1 愛着回避による対処行動後の変化のクロス集計表(脅威低)

	改善	悪化	変化なし	記述なし	その他	計
愛着回避低群	145(80.1)	8(4.4)	6(3.3)	22(12.2)	0(0.0)	181
愛着回避高群	110(68.3)	13(8.1)	13(8.1)	22(13.7)	3(1.9)	161
計	255	21	19	44	3	342

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

Table6-2 愛着不安による対処行動後の変化のクロス集計表(脅威低)

	改善	悪化	変化なし	記述なし	その他	計
愛着不安低群	136(76.0)	9(5.0)	7(3.9)	26(14.5)	1(0.6)	179
愛着不安高群	119(73.0)	12(7.4)	12(7.4)	18(11.0)	2(1.2)	163
計	255	21	19	44	3	342

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

Table7-1 愛着回避による対処行動後の変化のクロス集計表(脅威高)

	改善	悪化	変化なし	記述なし	その他	計
愛着回避低群	148(82.2)	16(8.9)	3(1.7)	13(7.2)	0(0.0)	180
愛着回避高群	116(69.9)	26(15.7)	3(1.8)	20(12.0)	1(0.6)	166
計	264	42	6	33	1	346

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

Table7-2 愛着不安による対処行動後の変化のクロス集計表(脅威高)

	改善	悪化	変化なし	記述なし	その他	計
愛着不安低群	148(82.2)	15(8.3)	2(1.1)	14(7.8)	1(0.6)	180
愛着不安高群	116(69.9)	27(16.3)	4(2.4)	19(11.4)	0(0.0)	166
計	264	42	6	33	1	346

注：数値は人数，括弧内は割合を示す。

よりも改善すると記述した人は少なかった ( $p < .05$ )。

## 考 察

親への愛着による、ストレス場面に対する原因帰属、対処行動、対処行動によるその後の変化の差異について、脅威度の異なるストレス場面での比較を中心に検討することを目的とした。以下、それぞれの結果について考察していくことにする。

### 場面に対する原因帰属

ストレス場面における原因帰属について検討した結果、脅威高場面では愛着回避の低い人は場面の起きた原因を親のやむをえない事情に帰属したが、愛着回避の高い人は親の希望した行動に帰属していた。これは、これまでの親子関係での相互作用によって作られた親に関する信念が影響していたと考えられる。Ainsworth et al. (1978) は、回避型の子どもに対する親の養育行動として、子どもの働きかけに拒否的にふるまうことが多いことを示している。このことから子どもは、親は有効性の低い存在であるという確信を持っていく。つまり子どもは、親に支援や保護を求めても、それを受け止めてもらえることが期待できないと思っていると考えられる。回避型の人は愛着回避の特徴を強く持っている (Brennan et al., 1998) ことから、愛着回避の高い人はそのように親について確信を持っている可能性が高い。すると、親に対する信頼感は低いことが予測される。例えば Collins & Read (1990) は、回避型の人は親の誠実さや親切心に対して疑いを持っていることを示している。このことから、子どもに強い心理的負荷をかける場面の原因に関して、親の都合のみによるものと帰属したのだと思われる。例えば実際の記述として、『父親が会社を辞め、新しい土地で会社をおこすため家族もみちづれに……。』などがみられた。

一方、愛着回避の低い人は、親に対する信頼感が高いと予測される。そのため、心理的に強い負荷をかける場面の原因は親が悪いのではなく、仕方なく起こってしまったと帰属したのだろう。実際にみられた記述として、『親が単身赴任になってそれについていくから。』などがあった。

次に、脅威低場面においては親への愛着による原因帰属の違いはみられなかった。愛着回避の特徴が強い回避型の人は、心理的負荷の高い状況になると認知の差や行動の差が出る傾向がある (e.g. Simpson et al., 1992)。そのため、愛着回避の高群低群間では差がみられなかったのであろう。そして、愛着不安の原因帰属に対する影響もみられなかった。愛着不安は自己評価に大きく影響する傾向がある (Griffin & Bartholomew, 1994)。例えば、愛着不安の低い人の方が自尊心は高い (丹羽, 2005)。そのため、自分に原因帰属しやすくなると思われ、先行研究でもそのような結果がみられている。しかしそうならなかったのは、場面の特徴にあると考えられる。原因として考えられることが限られ、偏りやすかったのであろう。そのため、差がみられにくかったと思われる。今後、原因帰属先として多様なものが想定できる場面を選択することが求められる。そのような場面になると、愛着による認知スタイルの特徴が原因帰属先に出る可能性が

高いと思われる。

### 場面への対処行動

親への愛着による対処行動のしかたの差異について、愛着回避の高い人は脅威高場面での対処に攻撃的行動をする人が多かった。金政（2005）においても、対人ストレス場面において回避型がネガティブ関係コーピング（関係を放棄、破壊する対処行動）を多くすることが示されている。このことから、愛着回避の高い人は対人関係における心理的負荷の高い状況では攻撃性の高い対処行動をする傾向があるといえるだろう。Kobak & Sceery（1988）は、アタッチメント軽視型の人は敵意が高いと友人から評価されていることを示している。このことから、愛着回避の高い人は攻撃性が高いといえるだろう。愛着回避の高い人が攻撃的に行動する理由として、攻撃することで心理的負荷の状況から退避することが可能になると考えられる。たとえば記述の中で、父親の過失に対して『父親に対する恨みをもつようになり、大人になってから父親の批判を繰り返す。』というものがみられた。批判して父親を自分から切り離すことで、父親によってもたらされる不安から回避できるのだろうと考えられる。

脅威低場面においては、対処行動に対して愛着による差異がみられない結果となった。愛着不安の高い人は、脅威低場面においても不安を高く感じやすいため、愛着不安の低い人との対処行動の差がみられやすいと予測されていた。しかし、そうならなかった理由として、対処行動の質やコミットメントの程度までみられなかったことが考えられる。脅威低場面において比較的多かった対処行動として問題解決がある。自由記述では親と話し合うなど、状況に焦点づけて対処することが書かれていたが、誰とどのように話を進めるのか、その時の態度などについては、愛着によって異なってくると考えられる。そのため、具体的にどのような問題解決行動プロセスをとるのか、どれくらいそれにコミットメントするかをみられるようにすれば、同じ問題解決行動でも質や量の違いが見えてくる可能性がある。

### 対処行動によるその後の変化

対処行動によるその後の変化に対する親への愛着による差異について、愛着不安の高い人は脅威高場面において対処行動の結果、悪化するとしていた。Baldwin, Fehr, Keedian, Seidel & Thomson（1993）は愛着対象に対して愛着行動をとった場合、どのような反応を返すかを予測させたところ、不安定的な愛着を持っている人は悲観的な反応をする結果を示している。このように、他者の支援に対して期待できないと考える傾向が強いといえる。また、愛着不安の高い人は自尊感情が低い（丹羽、2005）。つまり、自分に自信がなく、自分の価値観を低く評価している。すると、ストレス状況に直面した時、支援してくれる他者を期待できず、また、選択した対処行動も状況が好転するような効果をもたらすと肯定的には思えないのだろう。このような傾向は、親子間の相互作用において経験されたことが影響していると思われる。Ainsworth et al.（1978）はアンビバレント型の子どもの親の係わり方について、子どものシグナルに気づきにくく、親の気分によって子どもへの対応が変わる一貫性のなさを指摘している。アンビバレント型

は愛着不安の特徴を強く持つ愛着スタイルである。つまり愛着不安の高い人は、幼少期からストレス状況に直面した時、親の支援を受けながら、状況が期待したように変化するという経験が少なかったのだろう。

そして、愛着回避の高い人の方が脅威低場面において対処行動の結果、状況が改善するという人は少ない結果がみられた。彼らもアンビバレント型同様、他者の支援に対して悲観的である (Baldwin et al., 1993)。Ainsworth et al. (1978) は回避型の子どもの親の係わり方について、子どものシグナルに拒否的にふるまうことを示している。つまり、ストレス場面に直面した時、求めた親の支援を拒否された経験を幼少期から持っているため、引越しという親子関係の間で起こったストレス場面において、前向きに親に交渉してもそれが取り上げられるとは思わなかったのだろう。

### 本研究の限界と今後の課題

本研究は図版を用いて、親への愛着によるストレス場面での原因帰属、対処行動、対処行動によるその後の変化に関して、心理的負荷の異なる場面による差異について検討を行った。図版に対する反応は実際の反応を反映していると考えられるが、自由記述にしたため、特に対処行動に関しては詳細な違いまでとらえることができなかった。例えば、引越しする場面において、話し合いの結果最終的に親の言うことを受け入れる行動をしたとしても、一方的な親の命令に従う形になることと、対等に話し合って納得した上で親の言うことに従うことでは、話し合いの仕方が異なる。このように、子どもの対処行動だけでなく問題解決に向かうダイナミクスを検討することで、対処行動にとどまらない愛着の機能の特徴や、そのような機能を形成する親子関係の質を理解することができると思われる。そのため、親子がどのようにしてお互いに働きかけ、問題を解決させていくのかについて、面接や観察などの方法を取り入れて検討することが求められる。

### 引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E. & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Baldwin, M.W., Fehr, B., Keedian, E., Seidel, M. & Thomson, D.W. (1993). An exploration of the relational schemata underlying attachment styles: Self-report and lexical decision approaches. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 746-754.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. (1991). Attachment style among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol.2: Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1995). 母子関係の理論Ⅱ：分離不安 (新版) 岩崎学術出版社)
- Brennan, K.A., Clark, C.L. & Shaver, P.R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In Simpson, J.A. & Rholes, W.S. (eds.), *Attachment Theory and Close*

- Relationships*. New York: Guilford Press. pp.46-76.
- Collins, N. L., & Read, S. J. (1990). A safe haven: An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *78*, 1053-1073.
- Griffin, D. & Bartholomew, K. (1994). Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, *67*, 430-445.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, *52*, 511-524.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, *33*, 41-47.
- 金政祐司 (2005). 青年期の愛着スタイルと情動の調節と感受性ならびに対人ストレスコーピングとの関連—幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的—一貫性についての検討— パーソナリティ研究,*14*, 1-16.
- Kobak, R.R. & Sceery, A. (1988). Attachment in Late Adolescence: Working Models, Affect Regulation, and Representations of Self and Others. *Child Development*, *59*, 135-146.
- 久保 恵 (2000). 愛着表象の投影法的研究—親子状況刺激画を用いて— 心理学研究, *70*, 477-484.
- 中尾達馬・加藤和生 (2005). 成人における愛着スタイルと愛着行動の状況間一貫性 九州大学心理学研究, *6*, 9-20.
- 丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, *13*, 156-169.
- 丹羽智美・高木邦子 (2006). 青年期における親への愛着と対人関係 (2) —対人葛藤場面における原因帰属への影響— 日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集, 287.
- Pereg, D. & Mikulincer, M. (2004). Attachment style and the regulation of negative affect: Exploring individual difference in mood congruency effects on memory and judgement. *Journal of Personality and Social Psychology Bulletin*, *30*, 67-80.
- Resnick, G. (1989). Individual difference in adolescent attachment and its relationship to family cohesion and adaptability. Paper presented at the biennial meeting of the Society for Research in Child development, Kansas City, MI.
- 坂田成輝 (1989). 心理的ストレスに関する一研究—コーピング尺度 (SCS) の作成の試み— 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会科学・教育心理・体育学編), *38*, 61-72.
- Seiffge-Krenke, I. (2006). Coping with relationship stressors: The impact of different working models of attachment and links to adaptation. *Journal of youth and Adolescence*, *35*, 25-39.
- Shaver, P.R. & Mikulincer, M. (2007). Adult attachment Strategies and regulation of emotion. In J.J.Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford Press. pp.446-465.
- 島津明人 (2003). 心理的ストレスモデルの概要とその構成要因 小杉正太郎 (編著) ストレス心理学—個人差のプロセスとコーピング— 川島書店 pp.31-58.
- Simpson, J.A., Rholes, W.S. & Nelligan, J.S. (1992). Support Seeking and Support Giving within Couples in an Anxiety-Provoking Situation: The Role of Attachment Styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, *62*, 434-446.
- Zimmermann, P., Maier, M.A., Winter, M., & Grossmann, K.E. (2001). Attachment and adolescents' emotion regulation during a joint problem-solving task with a friend. *International Journal of Behavioral Development*, *25*, 331-343.